徒然草（花は盛りに）　＊

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。［50点］

花は盛りに、月はくまなきをのみ見るものかは。雨に向かひて月を恋ひ、垂れこめて春の行方 知らぬ[A]も、①なほあはれに情け深し。咲きぬ[B]べきほどの梢、散りしをれたる庭などこそ、見どころ多けれ。歌の詞書にも、「花見にまかりけるに、はやく散り過ぎにければ。」とも、「[Ⅱ]②障ることありてまからで。」なども書けるは、「花を見て。」と言へるに劣れることかは。花の散り、③月の傾くを慕ふ習ひは、さることなれど、ことに④かたくなる人ぞ、「この枝、かの枝散りにけり。今は見どころなし。」などは言ふめる。

問一　本文中には係り結びが成立している部分が二箇所ある。それについて、係助詞と結びの語をそれぞれ答えなさい。

問二　波線部A、Bの二つの「ぬ」の違いを文法的に説明しなさい。

問三　Ⅰ、Ⅱの詞書の後には、どのような言葉が省略されていると考えられるか。適切なものをそれぞれ選び、記号で答えなさい。

Ⅰ　ア　桜の花の美しさを讃えて詠んだ歌　　イ　桜の花が散った後の情景を詠んだ歌
　　ウ　桜の花を見られず絶望して詠んだ歌　　エ　桜の花を早く見たい気持ちで詠んだ歌
Ⅱ　ア　桜の花の美しさを想像して詠んだ歌　　イ　満開ではない桜の美しさを詠んだ歌
　　ウ　実際に見た桜の花に感動して詠んだ歌　　エ　桜を見られず残念な気持ちを詠んだ歌

問四　傍線部①～③を現代語訳しなさい。

問五　傍線部④について、(1)意味を答えなさい。また、(2)「かたくなる人」は月の鑑賞に際して、どのような態度を取ると考えられるか、説明しなさい。

問六　作者は「花」の見どころについて、どのように考えているか。その説明になるように、次の空欄a、bに適切な語句を入れなさい。

花は満開の時だけがよいのではない。花の盛りの前の［a］や花の盛りの後の［b］などにも見どころがある。

学年		問一	問二	問三	問四			問五		問六
		係助詞	A	Ⅰ	①	②	③	(1)	(2)	a
組										
				Ⅱ						
番号		結びの語								
		係助詞								
氏名										
		結びの語	B							b
得点										

徒然草（花は盛りに）　＊

〔出題の意図と留意点〕　基本的な文法事項が文章の中で捉えられるかをみる。さらに、省略などに注意しながら、作者の主張を順に読み取ってまとめていくことができるかをみている。古文であっても文章の大筋をつかむ力は必要である。

☆解答例と配点

問一　こそ・多けれ／ぞ・める　〈４点×２〉

問二　**Ａ**　打消の助動詞「ず」の連体形　**Ｂ**　強意（確述）の助動詞「ぬ」の終止形　〈４点×２〉

問三　**Ⅰ　イ**　**Ⅱ　ア**　〈２点×２〉

問四　①　やはりしみじみとして情趣が深い　②　さしつかえること　③　月が（西に）傾くのを残念に思う習慣　〈４点×３〉

問五　(1)　不粋な人　〈４点〉　(2)　満月の時だけが、月はすばらしく見どころがあると考える。　〈６点〉

問六　**ａ**　咲きそうな枝　**ｂ**　庭に散ってしまった花　〈４点×２〉

計50点

徒然草（花は盛りに）　＊＊

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。［50点］

よろづのことも、初め終はりこそをかしけれ。男女の情けも、ひとへに逢ひ見るをばいふものかは。逢はでやみにし憂さを思ひ、①あだなる契りをかこち、長き夜をひとり明かし、遠き雲居を思ひやり、浅茅が宿に昔をしのぶこそ、色好むとは言は（　Ⅰ　）。

【望月のくまなきを千里の外まで眺めたるよりも、暁近くなりて待ち出でたるが、いと心深う、青みたるやうにて、深き山の杉の梢に見えたる、木の間の影、うちしぐれたる群雲隠れのほど、またなくあはれなり。】椎柴、白樫などの、濡れたるやうなる葉の上にきらめきたるこそ、身にしみて、②心あらん友もがなと、都恋しう（　Ⅱ　）。

すべて、月・花をば、さのみ目にて見るものかは。春は家を立ち去らでも、月の夜は閨の内ながらも思へるこそ、いと頼もしう、をかしけれ。よき人は、Aひとへに好けるさまにも見えず、興ずるさまもなほざりなり。片田舎の人こそ、色濃くよろづは（　Ⅲ　）。花のもとには、ねぢ寄り立ち寄り、③あからめもせずまもりて、酒飲み、連歌して、果ては、大きなる枝、心なく折り取りぬ。泉には手・足さし浸して、雪には下り立ちて跡つけなど、よろづの物、よそながら見ることなし。

問一　空欄Ⅰ～Ⅲに当てはまるように、次の語をそれぞれ適切な活用形に直しなさい。

Ⅰ　む　　Ⅱ　おぼゆ　　Ⅲ　もて興ず

問二　傍線部①～③を現代語訳しなさい。

問三　波線部「きらめきたる」の主語は何か、答えなさい。

問四　【　】でくくられた「望月の……またなくあはれなり。」の一文は、［　(ア)　］よりも［　(イ)　］のほうがあはれである。」という形の文である。空欄(ア)・(イ)に当てはまる適当な語句を現代語で書きなさい。

問五　二重傍線部A「ひとへに好けるさまにも見えず」とあるが、それと同じ態度を表している部分を本文中から七文字で抜き出しなさい。

問六　作者の主張している物事を鑑賞する態度とはどのようなものか。二十五字以内で答えなさい。

問六		問五	問四	問二		問一
			（ア）	③	①	Ⅰ
						Ⅱ
			（イ）	問三	②	Ⅲ

学年
組
番号
氏名
得点

徒然草（花は盛りに）　＊＊

〔出題の意図と留意点〕　本文をよく読み込み、正確に現代語訳することができるかを確認する。そのうえで作者の主張を把握し、全体をまとめることができるかを問うている。主張のはっきりしている文はそれをまとめる練習をするとよい。

☆解答例と配点

問一　Ⅰ　め　Ⅱ　おぼゆれ　Ⅲ　もて興ずれ　〈３点×３〉

問二　①　むなしい（まま終わってしまった）約束を嘆き
②　情趣を解するような友がいてほしいものだ
③　脇目もふらず、見守って　〈５点×３〉

問三　月の光　〈４点〉

問四　(ア)　くもりない満月　(イ)　待ちに待った、欠けていて、ちょっと隠れている月　〈４点×２〉

問五　よそながら見る　〈４点〉

問六　目で見るだけではなく、距離をおいて想像する態度。　〈10点〉

計50点